

批判的ふり返しによる教師の能力開発の試み

—意識変容の学習理論の観点から—

池田 広子・朱 桂栄

1. はじめに

近年、国際化の進展に伴い、日本語教師がこれまでにない学習者の多様なニーズに応えることが求められている。この変化とともに、日本語教師の資質や能力の向上も重要な課題となってきた。

大人の学びについて、北アメリカの成人教育者クラントン(1992:203)は、意識変容の学習理論を提唱している。それによると、子どもの学びは「形をつくっていく (forming)」のに対して、大人の学びは「形を変えていく = 変容していく (transforming)」ことである。新しい知識を獲得し、自分の現在の前提、価値観、そしてパースペクティブを問い直すことが、意識変容の学習であるとしている。「批判的ふり返し」が、意識変容の学習の中心となるプロセスであると主張されている。批判的ふり返し(critical reflection)とは、徹底的に自己の実践を問うことで、自己の無意識・半意識的であった前提(価値観)を明らかにし、吟味し、妥当であるかを評価するというものであり、単なるふり返しや否定的ふり返しとは異なると指摘されている。

これらを踏まえて考えると、成人である教師の学びを実現するためには、新しい知識や技術の獲得だけでなく、教師がこれまでの自分の価値観や経験に向き合うことも必要であると言えよう。本稿では、上述した考えをもとに、成人である教師の成長を、「目標に向かって上に伸びていくものだけでなく、その場の状況や相手との関係により、今まで無意識・半意識的だったことに気付いたり、これまでの自信を喪失したり、価値観や前提を批判的に捉え直したりすることで生涯に渡って、絶えず様々な方向に変容していくことの積み重ねのプロセス」(池田 2006)として捉えたい。また、本稿では、批判的ふり返しを取り入れるこ

とで日本語教師の意識がどのように変容していくのかについて明らかにする。その上で批判的ふり返しによる教師の成長の可能性を追求する。

2. 先行研究

1930年代のジョン・デューイの思想の中では、学習における経験の価値が強調され、経験を自己の中に取り入れて内省(reflection/ふり返し)することが重要だと述べられている。ショーンは、デューイの思想に影響を受け、「行為の中の内省(reflection in action)」を重視した「内省(省察)的实践家」(1983)という考え方を提唱した。その後、内省を重視する考え方は、第二言語としての英語教育における教員養成にも影響を与えた。

日本語教員養成において、岡崎・岡崎(1997)は、多様な教育現場に対応するために「自己研修型教師」の育成を目指した「内省モデルに基づく日本語教育実習プログラム」を提唱している。ここでの内省は、実習生らが固定された教え方をそのままマスターするのではなく、「いつ、誰に、何を、どのように、なぜを問うこと」を通して自律的に考えていくことが目指されている。このような「内省モデルに基づく日本語教育実習プログラム」においては、多くの実践や研究が行われている(お茶の水女子大学実習報告書 2005,2006など)。また、横溝(2000)は、教師の成長を促す手段としてアクション・リサーチの有効性を提唱している。アクション・リサーチは、教師が自己成長のために自ら行動(action)を計画して実施し、その行動の結果を観察して、その結果に基づいて内省するリサーチ(research)のことである。つまり、アクション・リサーチの考えには、実践—内省—実践—内省のサイクルを重視している。迫田(2000)は、自己研修型教師の育成を目指して日本語教育実習にアクション・リサーチを取り

入れる試みを報告している。

一方、メジロー (1991) は、デューイとフレイレの批判的ふり返りの考え方を発展させ、自己を徹底的にふり返る学習の結果、前提 (価値観) がもう一度明らかにされ、自分の経験についてもっとはっきりと包括的、統合的に理解できるようになると指摘している。そして、このようなプロセスを意識変容の学習であると捉えている。

クラントン(1996:139)は、メジローの意識変容学習の考え方をさらに精緻化した。具体的には、「なぜその行動を行うのか、そもそもなぜそうなのか、なぜそう考えたのか、なぜ、変える必要があるのか等」というように考えを問い直すことが、意識変容を促し、専門家や教師の力量形成、すなわち教師の成長に繋がるという考え方である。

そして、批判的ふり返りの具体的な方策として、①前提を明確に述べる、②前提の源と結果を確定する、③批判的な問い直し、④代わりとなるものを想像するという4点を示している。また、批判的に問い直す作業に取り組むとき、脅迫するような方法で問い直さないよう注意を払わなければならないと指摘している (クラントン 1996)。

上述したように、日本語教師教育においては、学校教育、第二言語教師教育の影響を受け、内省という考え方が重視されていることが分かる。しかし、成人教育分野において重要視されている批判的ふり返りによる意識変容の学習の考えは、日本語教師教育では、ほとんど検討されていない。教師を「生涯にわたって発達していくもの」と考えた場合、批判的ふり返りによる意識変容の学習が日本語教師教育にも応用できると考える。

3. 研究概要

3.1 研究目的

本稿では日本語教師教育において、批判的ふり返りによってどのような意識変容の学習が見られるのかを明らかにし、その上で日本語教師の能力開発の可能性を追求することを目的とする。

3.2 調査対象者と調査者

本稿では、調査対象者を語り手とし、調査者を聴き手とする。実践の報告を行った語り手は、日本語教師1名 (以下Yと呼ぶ)。女性。30代。海外の大学において日本語教師歴3年、調査時大学院で日本語教育を専攻していた。

聴き手は、女性2名。調査時にYと同じ大学院で日本語教育を専攻していた。

3.3 批判的ふり返りの実施概要

先述した批判的ふり返りの方策の中で、「前提を明確に述べる」ための具体的方法として、クラントン(1996/2004:120)では、

- (1) 実践についてのジャーナルや自伝、自分の実践の哲学について書き、同僚や友人に説明すること。
- (2) 自分の実践を記録したビデオを分析し、他人に説明する

というような方法をあげている。

また、ブルックフィールドによると、自分の前提を吟味するのを支援する方法の一つとして、その人にとって「重要な出来事」をふり返ることが指摘されている。そして、前提は意識の底に深くしみこんでおり、当たり前のことと考えられ、はっきりと述べるのは難しいとされる。そのために、批判的ふり返りを協働という形を用いて複数回にわたって行う必要を示している。

三輪(2005)では、成人教育学を専攻とする学生のゼミで、批判的振り返りによる実践を行い、批判的振り返りを複数回に行うことの必要性を指摘している。本研究では、三輪(2005)の実践に基づき、協働で批判的ふり返りを3回実施した(1週間ごとの間隔有)。

1回目の批判的ふり返りでは、Yのこれまでの教育実践の中で最も重要だと思われる出来事について報告してもらった。事前にYに報告する内容をA4(1枚程度)に書くように依頼した。批判的ふり返りの実施中、Yの報告に対し聴き手は、簡単な質問や確認を行った。また、聴き手はYの気持ちに寄り添って、報告内容を丁寧に聴くよう留意した。

2回目の批判的ふり返りでは、1回目の報告内容を確認した上で語り手自身の価値観や原点にふり返るきっかけを促す質問を行った。具体的には、重要だとされる過去の教育実践の前提に向き合い、徹底してふり返るような質問(なぜそうなのか、なぜそう考えたのか)を行った。

3回目のふり返りでは、2回目の質問で得た回答について、「そもそもなぜそうなのか」徹底してふり返ることを促した。

3.4 本稿が対象としたデータ

各回は平均約 60 分実施し、語り手が語る際に、十分に考える時間を与えた。また、各回のふり返りはリラックスできる雰囲気の中で実施された。

上述した手順で批判的ふり返りを実施し、その際の発話をテープ録音し、文字起こししたもの(約 60 分×3)を分析データとする。

3.5 分析観点

本稿では、3 回にわたって収集したデータをもとに語り手の語り、意識変容の学習理論を援用して分析を行う。

4. 結果と考察

分析の結果、批判的ふり返りの実践により、以下のような意識変容のプロセスが見られた。

1 回目のふり返り

1 回目の批判的ふり返り(過去の重要な出来事の報告)において、語り手 Y は、海外での経験をふり返りながら、以下 3 つの矛盾があったことを語った。

- (1) 仲間を求める自分がいるのに対し、教師仲間がない自分。
- (2) 学歴社会が求めている教師像に対し、自分の学歴とのギャップがあること。
- (3) 他国で役立つことを希望する自分に対し、他国の家族を引き離している自分。

語りの中で「当時の経験については蓋をしたい(このようになったのは)海外派遣団体のせいだ」と述べていることから、海外での経験を否定的に捉えていることが観察された。また、Y のこのような語りは、自分が求めていた「当時の心的状況」への気づきであると示唆された。

2 回目の批判的ふり返り

2 回目の批判的ふり返りにおいては、以下のような点が観察された。当時日本語教師として自分自身が高い理想を持っていたことに気づき、海外での経験を否定的に捉えていたという語りが見られた。例えば以下のような例が観察された。

2 回目の批判的ふり返りにおいては、Y は「(A 国から B 国に) 国を変えても、対象を変えてもなんか、同じなんだな」という喪失感を表出し、A 国で自信が壊されたことを語った。これと同時に、Y は A 国では、「自分が若い人を(他国)へ送り出す装置となり、家族を家族と引き離れたこ

と」に対して、「罪悪感を持っている」と語った。また、聴き手とのやり取りを通して、Y は「国に役立つ人材はその国の中で活躍するのが望ましい」という考えを持っていることが確認された。その後、聞き手は Y に教師の役割などについてどう考えているかを問いかけ、Y に以下のような語りが見られた。

【事例 1】Y：(当時は日本語教師の役割を) たぶん、考えていなかったんでしょね。なんか、日本語教師っていう、なんか一見華やかなところに、国際的と思ったところに私は、飛びついて実際に置いてみたところ、なんのビジョンを持っていないくて、、ビジョンを持っていない自分に気づいて、すごくショックだった。

【事例 2】日本語を教えるっていうことでその人たちの未来の選択肢が増えるっていうことまでなってしまうて、そこまでは考えていなかったんです。

二つの事例の語りから、Y は学生の将来を視野に入れて日本語教師のビジョンを考えることが必要だと気づいていることが分かる。また、この中で Y は日本語教師という職業に関する自分の前提を吟味する様子が示された。

3 回目の批判的ふり返り

3 回目の批判的ふり返りでは、Y は自分の理想、自分の素養と海外での経験の関連性を整理し、前提を捉え直し、そして、これまでのパースペクティブが変化することが観察された

【事例 3】今後自分がどうしていけばいいのか、人や海外派遣団体のせいにしなくても 1 つの自分のエネルギーに代えられる気がします。

事例 3 の Y の語りから、これまでの徹底したふり返り、つまり批判的ふり返りにより、過去を肯定的に取り入れていくことが窺えた。そしてこのような語りは、これまで Y がもっていたパースペクティブの変化として示唆される。

1回目：重要な出来事の報告 ⇒ 2回目：批判的ふり返し ⇒ 3回目：批判的ふり返し
過去の経験のふり返し 過去の経験を否定 過去の経験を整理・肯定

当時の心的状況の気づき

前提の気づき・吟味

前提の捉え直し
パースペクティブの変化

図1. 批判的ふり返しと意識変容プロセス

5. まとめと今後の課題

以上、批判的ふり返しを通して語り手は、前提を問い直し、肯定的に捉えていくことが明らかになった。批判的ふり返しは、意識変容の学習の中心のプロセスであり、意識変容の学習に繋がるが、必ずしも意識変容の学習が起こるとは限らない(Cranton1996)。しかし、今回の事例では、批判的ふり返しを通して、Yは自分の過去を肯定的に取り入れ、次の行動を起こす力へ繋がる可能性が示されたと言える。このようなことは、教師が葛藤に直面し、自分自身の前提を徹底的にふり返ることで問題解決する能力を獲得したとも示唆される。そして、このような意識変容の学習のサイクルは、成人の学び、つまり教師の成長に不可欠と言えるよう。

今回は1名の教師を対象としたが、今後さらなる取り組みと実証的研究の積み重ねが必要である。

注

1. 入江他(2003,2004)は、クラントン(1992,1996)における原文の「transformation」を「変容」と訳している。本稿では、成人教育分野で使われている「transformation」を教師教育分野における「teacher development」(教師の成長)の同義語として捉えることとする。
2. reflectionには「反省的」「内省的」「省察的」という訳語がある。「反省」と言う日本語には「否定的ふり返る、自己評価する」の意味が伴う。「reflection」には、「肯定的なふり返し」も含まれると考えられることから、本稿では「内省的」及び「内省」という用語が適切であると考え、この訳語を用いることにする。

参考文献

- 池田広子(2006) 内省モデルに基づく日本語教育実習プログラムにおける教師の成長の可能性—問題解決型決定の観点から—『言語文化と日本語教育』第32号, 10-19
- 岡崎敏雄・岡崎眸(1997) 『日本語教育実習 理論と実践』アルク
- 迫田久美子(2000) 「アクション・リサーチを取り入れた教育実習の試み—自己研修型の教師を目指して—」『広島大学日本語教育学科紀要』第10号, 21-29.
- 三輪健二(2005) 「専門職が大学院で学ぶということ—成人学習特論I (2004)を例にして—」『生涯学習関係職員・指導者の養成と研修に関する比較研究 平成13-16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)研究成果報告書課題番号13571010』
- 横溝紳一郎(2000)『日本語教師のためのアクション・リサーチ』凡人社
- Cranton, P. (1992) *Working with Adult Learners*. Toronto: Wall & Emerson(入江直子・豊田千代子・三輪健二共訳 1999『おとなの学びを拓く—自己決定と意識変容を求めて—』鳳書房)
- Cranton,P.(1996)Professional Development as Transformative Learning-New Perspectives for Teachers of Adults. San Francisco: Jossey-Bass (入江直子・三輪健二監訳 2004『おとなの学びを創る—専門職の省察的実践をめざして—』鳳書房)
- Mezirow, J. (1994) "Understanding Transformation Theory." *Adult Education Quarterly*, 44.
- Schön, D. A. (1983) *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. Basic Books.

いけだ ひろこ／お茶の水女子大学
ikedata@fc5.so-net.ne.jp

しゅ けいえい／北京日本学研究中心
keieisyu@yahoo.co.jp